

〔書評〕 置き去られた書物とその広がりにもみる思想戦

―和田敦彦『大東亜』の読書編成 思想戦と日本語書物の流通』―

山内湧貴

一 はじめに

書物がその場に存在するということ、それはいかなる意味をはらんでいるだろうか。当然、書物はひとり歩きをしない。書物の移動には常にそれを取り巻く何者かの意思が介在する。また、書物はその読者、いかなれば必要が存在しない場所へは移動を果たさない。

しかしながら、需要という言葉を扱う際、それが自然にその場に生じたものであるのか、意図的にその場を作り出されたものであるのかという点には区別が必要となるだろう。

著者である和田敦彦はこれまでも読書研究という領

域について、書物の読者への広がりをとらえるという点に重点を置きながら、これを牽引してきた。前著『読書の歴史を問う 書物と読者の近代』^(一)においては、読書というものを書物が読者へと「たどりつくプロセス」と、読者が書物を読み、その内容を「理解するプロセス」とに分けたうえで、読書研究の方法について述べている。

いわば、前者は書物が時間や空間を移動して読者のもとへと至るまでのプロセスであり、後者はこれを受けて移動の末たどりついた書物を、読者が読んだうえで、その内容を理解するプロセスである。いかなれば、本書は主にこの前者の「たどりつくプロセス」につき、

実践しているものである。

本書における主眼は、そうしたこれまでの読書における「たどりつくプロセス」を対象にして、東南アジア諸国やブラジルに遺された日本語の書物について、それがその場に存在する意味、そしてその背景に存在する日本が実施した文化工作としてのねらいと実態を明らかにしていく点にある。一九三〇年代から四〇年代前半、すなわち日中戦争から太平洋戦争の時期にわたって、日本政府は海外へ向けて文化工作を実施した。これは、現代的な言葉に置き換えるなら、「ソフト・パワー」⁽¹⁾による文化外交であった。

当時、「大東亜共栄圏」の構想のもと、各国にて実施された日本による文化工作は、現在でも現地に遺る日本語資料コレクションという形でその痕跡を残している。これらの書物たちは、当時、いかにして、どのような人々により広められていき、またそれらは現地の人々にいかにして受容された、あるいはされなかったのだろうか。

著者は序章にて、「書物の内容を研究しても、それがどれだけ広がったのか、そしてどこで誰に作用していたのかを問うことはできない」と述べている。本書は読書というものを読者の行う個人的な「行為」に留まらず、書物が出版という時間、空間的な始発地点から数々の中継地点を経たうえで読者のもとへと届き、読者がその内容を読み、理解する、その全体をひとくくりにした「現象」ととらえたうえで、読書研究として構成した一冊であるといえる。

二 本書の概要

本書は、戦時期の日本、および東南アジアやブラジルを対象として、「書物の広がりをとらえる」という方法を通して国内の文化統制を、あるいは海外への文化工作を、さらにはその両者の連続性を解明していく⁽²⁾ものである。著者は、「書物を紹介し、あるいは、教え、訳し、広げる人々や組織に目を向けるのは、こうした

役割がこれまでの研究で見落とされてきたから」^(四)である。と述べる。そのうえで、書物の読者への広がり、すなわち書物が具体的に読者に「たどりつくプロセス」に着目したうえで、そのプロセスの中に点在する書物の仲介者がいかなる役割を果たしたか、という点や、書物がいかに受容されていったかという点を明らかにせんとしている。

本書は、このような問題意識が提示される「序章〈日本〉を発信する」から始まり、全体としては三部構成となっている。具体的には、以下の通り、序章と終章を含め一一章から構成されている。

序章 〈日本〉を発信する

第一部 国内の文化統制から対外文化工作へ

第一章 再編される学知とその広がり——戦時下の

国文学研究から

第二章 読書の統制と指導——読書傾向調査の時代

第三章 「東亜文化圏」という思想——文化工作の

現場から

第二部 外地日本語蔵書から文化工作をとらえる

第四章 アジアをめぐる日仏の文化工作——ベトナムに遺された日本語資料

第五章 日本を中心とした東南アジア研究へ——ハ

ノイ日本文化会館蔵書から

第六章 戦時下インドネシアにおける日本語文庫構

築

第七章 文化工作と物語

第八章 流通への遠い道のり

第三部 流通への遠い道のり

第八章 戦時期の日系移民地の読書空間——日本語

出版情報誌から

第九章 戦争表象を引き継ぐ——『城壁』の描く南

京大虐殺事件

終章 書物の流れを追いかけて

第一部では、文化工作のいわば最前線にあったといふ、雑誌『東亜文化圏』をとりあげ論じている。ここ

ではその活動を、日本地政学をはじめ、日本を中心とした価値尺度で再編された科学、学知を、文化工作という形で実践の場へと移していく活動であったと位置づけている。そして、こうした文化工作の実践はまた、文化工作の対象となる占領地の人々を調べ、広く知らせる活動に結びついていくこと、さらにはそれが文化工作方策の具体化や批判につながっていく点を論じている。

第二部では、日本文学における小説や物語は対外文化工作の中にどのように活かされ、機能していたかを論じている。その中でも、日本の文化や歴史をアジアの各地で広げ、発信していく際の教育メディアとして、講談文学が有効なものであると考えられていたことが明らかとされていく。

第三部では、ブラジルと中国を舞台としており、ブラジルにおける日系移民を対象とした日本語中心の出版情報誌『文化』を扱って、日本国内とは異なる日本語資料の需要のされ方を論じるとともに、南京事件を

テーマにした小説『城壁』を扱って、書物が読者にたどりつかなかった、あるいはたどりつかなくなった事例について論じられている。

著者は本書において採用する、書物の広がりをとらえるという方法が有する有効性について、大まかに二つを挙げている。ひとつには、文化の発信、宣伝を発信者、すなわち書物の書き手からのみではなく、それを教え、紹介し、訳し、広げる人や組織によってとらえることができるという点である。もうひとつには、国内に向けた学知や文化の統制と、対外的な文化工作との連続性を明かしてくれるという点である⁵⁰。本書はこれら二つの要点を論旨の根幹に置きつつ、論を進めていく。

三 総評

本書の内容は、二〇一三年から二〇一九年にかけて著者が行った海外調査がもととなっている。そのなか

でも、東南アジア諸国での調査においては、これまで十分に研究がなされてこなかったばかりか、その存在さえも一般に知られていなかった現地の日本語資料につき、目録の作成と並行しながら作業が進められたという。

なぜ、これらの日本語資料が今日までほとんど研究がなされてこなかったかという問いに対して、著者は、そもそも現地の所蔵図書館に日本語資料を扱うことのできる職員が雇用されている場合が稀であり、かつ過去の日本語資料の整理にまで手が回らないという現状を説明している。その結果、整理や保存がきちんと行われず、そもそも資料がそこに存在するという事実さえもおぼろげにしかわからないという状況にあるのである。本書は、こうした状況下において、置き去られた書物の存在を指摘するだけでなく、それを日本語資料として整理、保存したうえで、研究という形にまとめあげ、そこに秘められた可能性を示している。

本書の評価できる点としては、決して日本が戦時期

に実施した文化工作を寄せ集めた事例集というような形式に留まることをせず、そこから得られた知見をいかに今後の読書研究の分野へ、ひいては社会へと還元していくか、という点までが見据えて語られている点である。過去、日本が広めた書物を今一度ひも解き、確認するということには、やはり日本人の立場から行うことにこそ意味があり、またそこには現代を生きる日本人としての責任もあるだろう。そして、こうした遺された日本語資料を改めて調査することは、決して歴史的な価値のみを含むものではない。

これらを改めて検証することによって、現代において互いの言語や文化を国境を越えて学び合い、伝え合うことについて考える手がかりにもなりうるのである。著者は「過去にむけてのみならず、現在、そしてこれから、私たちが日本の言語や文化をどう発信し、また、海外の文化とどう関わり合っていくのかを考えていく土台ともなる」^(六)と述べている。

一方で、読んでいて疑問に思った点をひとつ挙げる

ならば、第三章にて述べられている『東亜文化圏』にまつわる文化工作をめぐる著者の評価である。第三章においては、『東亜文化圏』をとりあげ、その活動は日本中心の価値尺度で再編された科学、学知を、文化工作という形で実践の場に移していく活動であったことが述べられている。そのうえで、著者はこうした文化工作の実践が文化工作方策の具体化や批判へつながっていくことを論じている。ただし、著者は『東亜文化圏』の場合、「そこで生まれる文化工作への批判は、あくまで目的を達成する方法に対する批判であって、目的そのものへの疑いや批判には至ることはなかった」としている。

すなわち、ここで生まれた批判というものはいかに文化工作を効率的に、かつ効果的に実施するか、という視点から生じたものでしかなく、日本語や日本文化の価値を押し広げ、「文化圏」を作り上げていくという文化工作の目的自体については揺らぐことがなかったとされている。

しかしながら、戦時期において直接的な軍事力に留まらず、文化工作などの形であらゆる国力が動員されていく状況において、目的そのものへの疑いや批判を表明することは容易ではなかったのではないかと思われる。仕事や役職といった社会的役割にもとづき動員された人々が、内心は別として、与えられた目的それ自体を疑い、批判することは可能だったのだろうか。官民を問わず、国家によるひとつの目的へと向き直させられていく社会において、文化工作の担い手、すなわち書物の仲介者たちが、どのようなはたらきを果たし、そこで何が行われようとしていたか。それを問う際に、こうした社会状況のもとで文化工作へも人員が動員されており、彼らは社会的な要求にもとづいて自らの役割を果たす必要があったということは考慮に入れることが望ましかったのではないかと考える。『東亜文化圏』をめぐる文化工作の成り行きを描くうえで、こうした視点についても組み込むことで書物の広がりや問うという著者の問題意識、ひいてはそこに存在す

る仲介者の役割や文化工作の実態がいかなるものであったかという点について、より詳らかに把握することがかなうのではないだろうか。

四 図書館と文化工作の視点から

ところで、評者はメディア学の畑の人間ではなく、浅学ながら、図書館情報学を専門領域としている者である。より具体的に述べれば、そのなかでも主に日本における図書館史に関心を持っている。

そうした立場から本書を読み進めるなかで関連して思い出されたこととしては、日中戦争期に植民地での文化工作において当時の図書館関係者らがこれにかかわり、協力していたということである。これについては、たとえば小黒浩司『図書館をめぐる日中の近代 友好と対立のはざままで』^①が詳しい。一般的な日本の図書館史において見過ごされてきたことのひとつとして、外地や植民地における図書館活動という領域があるが、

本書で語られる内容はまさにこうした部分についても新たな知見を与えるものであると感じる。

『図書館をめぐる日中の近代 友好と対立のはざままで』においては、「北支文化工作」の拠点として、北京近代科学図書館が活用されたことが取りあげられている。日本は当時、「北支五省」を「第二の満州国」化しようとして画策していた。同館は、そのなかで日本が、「日本ニ対スル支那人ノ認識ヲ強メ以テ日支両国々民ノ精神的諒解ヲ強化スル」ことを「使命」とし、「支那人ヲシテ日本人カ支那ヲ如何ニ見居ルカラ知ラシメ反省ノ資トスル」図書を収蔵し、さらには「支那人ノ思想的動向ヲ観測スル」^②ことを目指して一九三六年に設立されたものである。同館は、主として日本語教育事業を精力的に行ったほか、映画会を実施し、日本紹介を兼ねた日本映画を上映するなどの活動も行っていた。日本の図書館界は、同館と強い結びつきを持っていた。一九三九年には、同館の創立委員・理事や、設立後は館長代理を務めた山室三良が、日本図書館協会(以

下、日図協とする。評議員に選出されている。また、

一九四一年には、本書でも名前の挙がった中田邦造が北京を訪れ、華北各省市社会教育人員短期講習会の講師として、「新秩序建設と図書教育」と題する講義を四日間おこなっている。彼の評議員選任は極めて政治的な人事であった(二〇)とされる。また、当時日本の図書館界は、この時期に一貫して日本の対中政策を支持する立場をとっていたことが明らかとされている(二一)。

一方で、本書において特に図書館が深く関係しているのは第二章である。ここでは、中田邦造の読書指導や、読書傾向調査といったものが、思想統制手段の一部となっていたことが論じられている。読書傾向調査は調査それ自体を目的とするのではなく、読書指導を見据えたものであり、読書は個人の営みに完結するものから戦争へ向けて、動員の手段へと結び付けられていった。そして、本書では、こと読書指導という事例において、日本国内に向けた文化統制の手法が、海外に向けた文化工作の手法として転用されていく具体的な

な一例であることが述べられている。

本書においては、戦時下の文化の統制や文化工作について、そのいわば仲介者の役割を明らかにしつつ、書物の読者への広がりをとらえることを通して、これを掘り下げていった。これをふまえて、先述の北京近代科学図書館の例をみれば、当時の図書館界は、植民地における文化工作についてその仲介者としての役割を直接的にも、間接的にも大きく担っていたことがわかる。当時、図書館界は日本の対中政策を支持する立場を表明し、文化工作の拠点を意図して設立された同館とも深くかかわりを持っていた。そして、本書においては、国内で行われていた文化統制の手法が、満州での読書指導という形で転用されていくことが明らかとされていた。

そうしたときに新たに生じる疑問がある。満州においては、日本国内における文化統制と満州で行われた文化工作との連続性が確認されたが、それならば日本が「第二の満州国」とすることを目指した北支におい

ではどうだったのだろうか。当時、図書館の活動としても文化工作の手法としても常道であった読書指導というものの影響を、日本の図書館界との深いかかわりを持ち、何より文化工作の拠点として設立された北京近代科学図書館においても少なからず受けていてもよいように思う。しかしながら、先行研究をあたっても、管見の限りでは同館が読書指導に注力したというようなことは述べられていない。この点につき、北支での文化工作において、日本国内での文化統制との、そして、同様に文化工作が行われた満州との接続がどのように生じたのか、あるいはうまく生じなかったとするならば、そこにはどのような仲介者たちの役割、書物の広がりの実態が存在したのだろうか。先述の通り、

外地や植民地における図書館活動という領域は、日本の図書館史のなかであり注目されてこなかった部分である。しかしながら、日本の図書館史上においても大きな存在感を放つ読書指導という言葉と、これらの領域とは連関していることが本書を通じて実証された。

これは言いかえれば、日本の図書館史においていまだ注目を得ず、しかしながら、大きな学問的価値を占み得る研究対象が掘り返されず、いくつも埋もれたままにされているということの示唆であるともとらえられるだろう。本書の貢献を呼び水として、図書館界においても、これを契機に現在までおざなりにされてきた諸領域に関して、今ひとたび価値の再認識がされることを期待したい。

五 おわりに

以上、評者の専門的な関心にも引き付けつつ、議論を進めてきた。前章で言及したような図書館も含めて、書物が読者にたどりつくプロセスと、その道中に点する仲介者らの役割について改めて見つめ直すことで、読書という現象の広がり、それがいかに思想戦のなかに組み込まれ、利用されようとしていたか、ということとを本書は論じていた。

ただ、著者も述べている通り、読書会や読書日記における読書の可視化は、読んだ図書の規範や価値観をそのまま内面化、身体化することに結びつくわけではない。こうしたものに付随する指導は、指導者との対話として機能するほか、惑わせ、だますような戦略をも取り得るからである^(一)。著者は、読書の内面化については、『読書日録』、『読書日記』の調査により、今後明らかとされていくかもしれないとするが、たとえ内面化という個人の内心において行われる行為であったとしても、書物が「たどりつくプロセス」はそこへ必ず何らかの影響を及ぼし得るのであり、その影響を加味せず内面化を扱うことは不可能であるということ^(二)は、本書のもたらした貢献に鑑みれば明らかである。

この点については、今後の研究を待ちたい。

しかしながら、いずれにせよ本書はこれまで見落とされてきた書物の広がりという点に目を向けながら、読書研究という領域について、その解像度をより精緻に高めることを実現している。この点から、ほぼ未踏

の領域を提示し、それを切り開く先駆者としての貢献を著実にもたらしめていることはたしかであり、今後の読書研究の可能性を広げる一冊であるといえる。

(一) 和田敦彦『読書の歴史を問う 書物と読者の近代 改訂増補版』文学通信、二〇二〇。

(二) 和田敦彦『「大東亜」の読書編成 思想戦と日本語書の流通』ひつじ書房、二〇二二、一三頁。

(三) 同書、二頁。

(四) 同書、五頁。

(五) 同書、二七八頁。

(六) 同書、二九〇頁。

(七) 同書、一一〇頁。

(八) 小黒浩司『図書館をめぐる日中の近代 友好と対立のはざままで』青弓社、二〇二六。

(九) 一九三七年三月二五日佐藤尚武外務大臣発加藤書記官宛二七八号電

『北平日本近代科学図書館将来ノ方針二関スル件雑件、第巻』

(一〇) 前掲(八)、一一六頁。

(一一) 一九三七年、日図協は「暴戾なる支那匪賊の刺滅に奮闘せられつゝある我が忠烈なる将兵に対し」慰問図書を贈るため、寄付図書・雑誌を募集している。また、日図協は満州事変に際しても同様の取り組みを行っていた。前掲(八)、一二四―一二五頁。

(二) 剪揚 (二), 八二頁。
